

鳥類

鳥類は調査期間中に全体で 14 目 35 科 96 種が確認できた。スズメ目が種数で一番多く、その中の幾つかの種は市内で繁殖もしている。各調査地でのセンサス結果から、個体数の一番多く観察できたのはスズメで、次にヒヨドリ、カシラダカ、カワラヒワ、ムクドリ、ウグイス、ホオジロ、ハシボソガラス、シジュウカラ、キジバトと続く。さらに 11 位からガビチョウ、ハシボソガラス、シメと続き、これらの中のカシラダカとシメは冬鳥であるが、他の種は留鳥と言われる一年を通して生息している種である。今回の市内での出現確認種は 96 種で、生息種数としては、あまり多くもなく、少なくもないという数字であり、市内の自然環境が農耕地、住宅地、丘陵地、河川などと多様性に富んでいることを反映している。鳥類は最近、多くの種が個体数の減少傾向にあり、今回の調査では鳥類相や個体数の変化も念頭において、定量的な調査も行ってみた。8 年で調査場所が一巡する設定である。しかし、8 年間での鳥類相や個体数の変化はあまり顕著には現れていなかった。しかし、ラインセンサスによる個体数の把握は、一昔前の鳥類相と現在が大きく変化してきていることがよくわかり、35 年も前の 1984 年に市内の 6 か所で行った調査記録と比較すると大きく変化している。増加した種はハシボソガラス、ガビチョウ（外来種）、キビタキ、カワウなどがあったが、個体数の減少が顕著であった種は、カシラダカ、ホオジロ、ハシボソガラス、セグロセキレイなど多くの種で個体数の減少、あるいはタゲリ、コサギなどまったく見られなくなっている鳥もある。鳥類の個体数の減少は、世界的な傾向であるが、国内でも多くの種の個体数が減少している。特に最近の減少傾向は著しく、身近だった鳥も気がつく姿を消している。この報告は、そんな鳥の市内での状況を記したものである。

No	目名	科名	種名	No	目名	科名	種名
1	キジ目	キジ科	キジ	13	ペリカン目	サギ科	アマサギ
2			コジュケイ	14			コサギ
3			オシドリ	15			チュウサギ
4	カモ目	カモ科	カルガモ	16			ダイサギ
5			コガモ	17			ヨシゴイ
6			マガモ	18			ツツドリ
7	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	19	カッコウ目	カッコウ科	カッコウ
8	ハト目	ハト科	キジバト	20			ホトトギス
9			ドバト	21			クイナ
10	カツオドリ目	ウ科	カワウ	22	ツル目	クイナ科	オオバン
11	ペリカン目	サギ科	アオサギ	23			バン
12			ゴイサギ	24	チドリ目	チドリ科	イカルチドリ

No	目名	科名	種名	
25	チドリ目	チドリ科	コチドリ	
26			タゲリ	
27		シギ科	イソシギ	
28			キアシシギ	
29			クサシギ	
30			タシギ	
31	オオタカ			
32	タカ目	タカ科	ツミ	
33			ハイタカ	
34			トビ	
35			サシバ	
36			ノスリ	
37	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	
38	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	
39			アオゲラ	
40			アカゲラ	
41			コゲラ	
42	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	
43			コチョウゲンボウ	
44			ハヤブサ	
45	スズメ目	カササギヒタキ科	サンコウチョウ	
46		モズ科	モズ	
47		カラス科	オナガ	
48			カケス	
49			ハシブトガラス	
50			ハシボンガラス	
51			ミヤマガラス	
52		シジュウカラ科	シジュウカラ	
53			ヤマガラ	
54			ヒガラ	
55			ヒバリ科	ヒバリ
56			ツバメ科	ツバメ
57			ヒヨドリ科	ヒヨドリ
58			ウグイス科	ウグイス
59			ヤブサメ	
60	エナガ科		エナガ	

No	目名	科名	種名
61	スズメ目	ムシクイ科	メボソムシクイ
62		メジロ科	メジロ
63		ヨシキリ科	オオヨシキリ
64		セツカ科	セツカ
65		ミンソサザイ科	ミンソサザイ
66		ムクドリ科	ムクドリ
67			コムクドリ
68		ヒタキ科	ジョウビタキ
69			アカハラ
70			シロハラ
71			ツグミ
72			クロツグミ
74			トラツグミ
76			ルリビタキ
77			オオルリ
78	キビタキ		
79	スズメ科	スズメ	
80	セキレイ科	キセキレイ	
81		セグロセキレイ	
82		タヒバリ	
83	アトリ科	ハクセキレイ	
84		ピンズイ	
85	アトリ科	カワラヒワ	
86		シメ	
87		イカル	
88		ベニマシコ	
89		アトリ	
90	ホオジロ科	ウソ	
91		アオジ	
92		クロジ	
93		ホオジロ	
94		ホオアカ	
95		オオジュリン	
96		カシラダカ	
97	チメドリ科	ガビチョウ	
98		カオグロガビチョウ	

サギ科 アオサギ

90年代になってから市内では普通に見られるようになった。70年代に初めて見たときには鶴が飛んでいると勘違いするほど大きな色彩豊かなサギである。サギ類とツル類との違いは、飛んでいるときに首を折りたたみ短くするのがサギ類、首をまっすぐに伸ばして飛ぶのがツル類である。サギ類は一般的にグエーと鳴くだけで、声が悪い。他のサギ類と混じって集団繁殖（コロニー）を形成するが、単独でも繁殖する。現在でも東平で繁殖している場所がある。



アオサギ

サギ科 ダイサギ

アオサギに次ぐ大きなサギで、全身が白い、シラサギと呼ばれる仲間では一番の大きさである。嘴は黄色、繁殖期には黒く変わるが、背中に生える蓑羽くちばしを立てると美しい。以前には個体数は少なかったが、最近河原、水田に見かける白いサギはほとんど、このダイサギである。魚類やカエル類を捕食する。



ダイサギ

サギ科 コサギ

全身の白いサギの仲間は、ダイサギ、チュウサギ、コサギがいる。この3種の内では一番小さいのがコサギで、ダイサギの半分くらいの大きさしかない。足指の黄色が特徴である。市内では1年を通して普通に見られた種であったが、最近ほとんど見られなくなった。



コサギ



ゴイサギ

サギ科 ゴイサギ

夜、クワツ、クワツと鳴きながら飛ぶ声を聞く。闇に紛れているので、姿を見ることも無かったが、名前だけは覚えていた。最近では白サギの集団繁殖地内に多くの個体が混じり繁殖している。写真は成鳥で頭には白い冠羽が2本あり、意外に美しい。その姿から宮廷で五位の位をもらったという故事があり、名前になっている。ただし幼鳥は茶色で斑点のある目立たない色をしている。夜行性なのだが繁殖期は昼間も餌採りに忙しく活動する。



ササゴイ

サギ科 ササゴイ

子供の頃、上沼や市野川に魚釣りに行くとき、岸辺からキョーと一声鳴いて飛び逃げていったのがこの鳥。ゴイサギだと思っていたが、この鳥はササゴイであり、別種と分かった。市内では松山神社や箭弓稲荷神社など大きなスギの森がある場所で繁殖していた。この鳥は魚食をするが、時に疑似餌を使った漁をすることが知られている。現在は埼玉県内では生息は稀になり、見ることは難しくなった。今回の調査でも一度も見られていない。



カッコウ

カッコウ科 カッコウ

もっともポピュラーな名前で、鳴き声のとおりであるが、最近では個体数が減少して、見かけることは稀になった。調査では宮鼻地区で記録があった。他種の巣に自分の卵を預け、子供を育ててもらおう托卵行動が有名である。托卵は個体毎に宿主(托卵する

相手)が決まっています、オオヨシキリ、モズ、オナガ、ホオジロなどに托卵する。托卵方法は自分の卵を1個だけ宿主の産卵中の巣に産み込み（右写真・下側中央1個がカッコウ卵、他5個はオオヨシキリ卵）、宿主卵より早く孵化して、雛は宿主の卵を自分の背中に載せて、巣の外に落として、巣を



カッコウの卵（下中央）

独占し仮親に育ててもらおう。しかし、宿主の親はカッコウの卵を自分の卵と見分けて排除する個体もいて、カッコウの卵は生き残るために仮親の卵に似た卵になり、仮親は見分ける能力を向上させている。この盾と矛の関係を軍拡競争と呼び、共進化の手本になり、研究者も多い。しかし、仮親は雛が孵化して巣を独占した後は、どんなに自分の子供と似ていなくても排除する能力は獲得していない。

ところが、最近の研究ではオーストラリアなどの南半球では、卵は見分けないが、孵化した雛を見分けて排除する鳥もあることが判り、カッコウ類の研究は新たな段階に入っていることが報告されている。

カッコウ科 ホトトギス

5月中旬過ぎになると渡来してくる夏鳥で、平安時代から和歌にも詠まれている。トッキョ、キョカキョクと聞こえる声で、雄は盛んにさえず囀る。夜間にも鳴いて移動する個体もいて明け方暗い内に鳴き始める。雌は雄のように鳴かず、ピッピッピッと鳴くだけある。ウグイスに托卵をして、宿主のウグイス卵に非常に良く似た赤い卵を産む（右写真・上側左1個がホトトギス卵、他3個はウグイス卵）。雛は宿主の卵を棄て、巣を独占して仮親に育てられる。



ホトトギス



ウグイス卵とホトトギス卵



アオゲラ



コゲラ



イカルチドリ

キツキ科 アオゲラ

分布は北海道を除く日本国内だけで、北海道には良く似たヤマゲラが分布する。サクラやクリなどの生木や枯れ木などに穴を開けて繁殖する。ピョーピョー、ケツケツケツ・・・と鳴く。年間を通して生息し市内でも繁殖しているが、最近は少し個体数が減少している。

キツキ科 コゲラ

小型のキツキでスズメくらいの大きさ、ギー、ギーキツキツと鳴き、木を登っていくのをよく見る。1970年代以降に山林に枯れ木が多くなった頃に、個体数も増加し、庭や公園などでも普通に見られたが、現在は、また個体数が少なくなり、目撃例も少なくなった。

チドリ科 イカルチドリ

都幾川の河原では以前には多くの個体が繁殖していたが、最近は少なくなった。河原の小石や砂の混じった地上に巣を造り、子育てをする。卵は保護色をしていて、周りの石と非常に良く似た色をしている。また、親鳥も羽色も隠蔽色で、抱卵中の親鳥を遠くから見つけるのは難しい。抱卵期の親鳥は外敵が近づくと、静かに巣を離れ、遠くから見守っている。都幾川では河原に草の繁る場所が増え、繁殖場所が少なくなり、さらに川遊びに来る人や車に巣を潰され、繁殖成功率は良くない。

タカ科 オオタカ

オオタカは1970年代には東松山市周辺には生息していなかったが、1980年代から増加して、あちこちで目撃できるようになっている。雄はカラスと同じ大きさで、雌は少し大きい。鳥類や小型の哺乳類などの生きた獲物を捕り、食べる。成鳥はお腹が白く、背はスレート色をしていて、黄色い虹彩を持つ、精悍な鳥である。オオタカの名前は大きい鷹ではなく、背中の青みがかったスレート色からきていて、漢字名では蒼鷹と書く。



イカルチドリ巣と卵



オオタカ雄成鳥

タカ科 サシバ

市内の丘陵地などで、1970年代には優占していた、カラスより少し小さめのタカ類で、夏鳥として4月に渡来し、ピククイー、ピククイーと盛んに鳴く姿を目撃したが、最近、市内ではほとんど見ることはできなくなった。全国的にも減少中で、環境省の絶滅危惧Ⅱ類にも指定されている。カエルやヘビ、昆虫などを捕食している。



オオタカ



サシバ



サシバ雄成鳥



カルガモ

カモ科 カルガモ

国内で一年中見られるカモ類で、個体数も多く、河川や池などに生息する。ゲュー・・・と濁った声で鳴き、黒い^{くちばし}嘴の先端の黄色が特徴。都会では巣場所から池へ引っ越す光景が話題になるが、市内でも繁殖していて、池の周りや、水辺から離れた林の開けた林縁にも巣を造る。



カワセミ

カワセミ科 カワセミ

市内の河川に生息している。ツイーと鳴いて、水面上を直線的に飛んで行く青い背中が見える。以前より個体数は減少しているものの、川岸の道を注意深く歩いていれば、出会うこともできる。魚食で、小さい魚を捕食し、小さな垂直の崖に横穴を掘って繁殖する。



ヨタカ

ヨタカ科 ヨタカ

以前には市内の森に居たが、今回の調査では目撃できていない。50年前には滑川町の月の輪から市内に暗くなってから戻ってくる道で数個体を数えたくらい普通にいた。キョキョキョ・・・と鳴く。現在は国内でも個体数が激減して、ほとんど出会うことも無くなった。森林の伐開した裸地の地上に巣材も敷かず、卵を2個産む。以前に観察したペアは雌が一日の内の80%以上を抱卵していた。雄は10%程度で、昼間は雌が暑さに耐えて、動かず抱卵を続けていたのには驚嘆した。写真は雌個体で、木の枝に沿って止まり、静止している。

ハト科 キジバト

山バトと称される。デッデッポー・・・と鳴き、ハト類のなかで最も普通の種である。市街地でもよく見かけ、庭などでも繁殖している。秋に翼を広げ滑空して、なわばり誇示飛翔をする姿をよく目撃する。繁殖期は長く春から晩秋まで巣が見られる。



キジバト

キジ科 キジ

日本の国鳥であるが、狩猟の対象になっている。雄は春には開けた場所に出て少し濁った声で羽ばたきホケー、ホケーと力強く鳴き、なわばりを主張する。この時期が一番目立つ時で、繁殖が始まると静かになり、姿もあまり目立たなくなってしまう。一夫多妻の繁殖システムをもっていて、雄は複数の雌を従えている。



キジ

ウグイス科 ウグイス

有名な鳥であるが、意外に姿は知られていない。藪の中に棲んでいて見かけることは少なく、目立つ場所に出るのは繁殖期の始まり頃だけである。体色はウグイス館の色とはまったく違っている。この鳥も一夫多妻の繁殖システムをもっていて、雄はさえず囀り、なわばり防衛、外敵などからの警戒などをして、谷渡りと呼ばれるケキョケキョ・・・という鳴き声は警戒している声である。雄はスズメより小さい鳥で、雌はさらに小さい。抱卵から子育ては雌だけで



ウグイス

行かう。アズマネザサの繁茂と共に個体数は増えたが、雛が巣立つ繁殖成功率は驚くほど低く、20%以下である。冬も山林に残り、チャチャチャ・・・と鳴く。



エナガ

エナガ科 エナガ

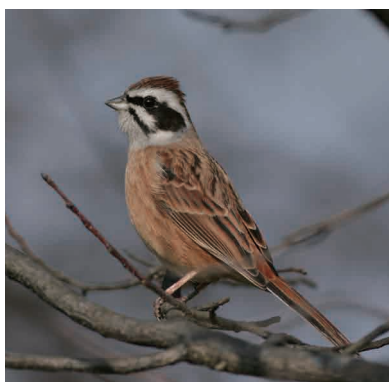
国内に住んでいる鳥の中でも小さい部類に入る。夏の終わりから春までシジュウカラ類と共に混群をつくり、群になって林を移動するのを目撃する。またこの種だけでも10羽前後の群をつくり、生活していて、群のなかの個体間の結びつきは強い。春には雌雄のペアとなって、苔や植物をクモの糸で巣をつくり、中には鳥の羽を多量に運び入れる。羽毛布団のようで暖かい。



オオヨシキリ

ヨシキリ科 オオヨシキリ

水田や河川の水辺のヨシ原でギョッギョッシ、ギョッギョッシと賑やかな声で鳴いている。大きく開けた口の中は赤い。夏鳥で5月に渡来し、ヨシ原内に巣をつくり繁殖する。一夫多妻で繁殖するが、数羽の雌を獲得するもの、1羽だけの雌しか獲得できないものもある。



ホオジロ

ホオジロ科 ホオジロ

開けた草原や林縁に生息し、市内でも繁殖している。以前、市内では多い鳥であったが、最近は少なくなった。冬、多くの個体が北から渡ってくるので、草原でも良く見かける。50年以上前にはカッコウに頻繁に托卵を受けた記録もあるが、最近はほとんど無い。この小さい鳥は、自分の卵と托卵されたカッコウ卵を見分けて、托卵された卵を排除してしまうことも実験的に確かめられている。どこにこの小さい鳥にすごい能力があるのか、驚嘆する。

セキレイ科 セグロセキレイ

中流域の河川に生息する代表的なセキレイの仲間であり、市内の川でも普通に見られる。川の瀬が採食場所で、強いなわばりをもち、雌雄の2羽で餌を採っている。隣の個体とは目に見えないがなわばりの境で、鳴き合いながら争う。時には体が触れ合う直接攻撃もある。しかし、なわばり防衛行動が強い彼らも、夜には数十羽の集団になり、街路樹などに^{ねぐら}峙をとる。夜間は餌資源を守るよりも、フクロウなどの捕食者から自分の身を守ることが優先し、互いの利害関係が合致し、一時休戦である。夜が明ければ、またなわばりに戻り生活する。



セグロセキレイ

セキレイ科 ハクセキレイ

今では繁殖している姿をよく見かけるが、30年くらい前には冬にしか目撃できない鳥であった。セグロセキレイのよく見られる河川敷には、あまり姿を見せない。農耕地など開けた地面のある場所で採食している。この鳥も夜間には集団で^{ねぐら}峙をとるが、1000羽を超える大きな集団になり、明るい、交通量の多い交差点の電柱や電線に並んで眠っている。



ハクセキレイ

ヒタキ科 キビタキ

夏鳥で4月下旬には東南アジアから渡来する。広葉樹の林に住み、良い声で複雑な^{さえず}囀りを行う。スズメより小さい鳥で、写真は雄で、雌は茶色で目立たない。繁殖は一夫一妻で、強いなわばりを持っている。国内に渡来する夏鳥のほとんどは個体数が減少しているが、この鳥は近年になって、市内の林や、周辺の町の林でも生息確認が増えている。



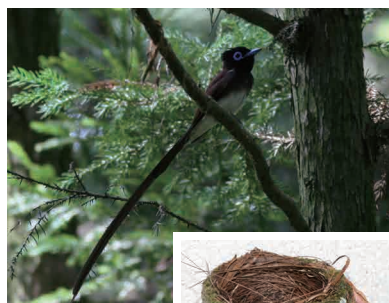
キビタキ



ジョウビタキ

ヒタキ科 ジョウビタキ

ヒッ、カチカチと尾を振りながら鳴く。秋 10 月下旬には冬鳥として渡来する。写真は雄で、雌は褐色で地味な色をしているが、翼の中央にある白い斑点が目立つ。鳴き声通りヒッカチとか、紋付鳥とかよばれることがある。人も恐れず庭にもやってきて、ウメモドキなど小さい木の実やミミズなどの動物を捕食する。



サンコウチョウ



サンコウチョウの巣

カササギヒタキ科 サンコウチョウ

ツキヒーホヒ、ホイホイと聞こえる声で鳴く。5 月に渡来して、薄暗い林に生息する。身体はスズメくらいだが、雄は 30cm もある長い尾をもつ。50 年も前には市内のあちこちの林に生息、繁殖していた。最近は個体数が減少して、見ることは難しくなった。インドネシアのスマトラ島で越冬していると言われるが、越冬地では森林が大規模に減少し、その影響もあると考えられる。



シジュウカラ

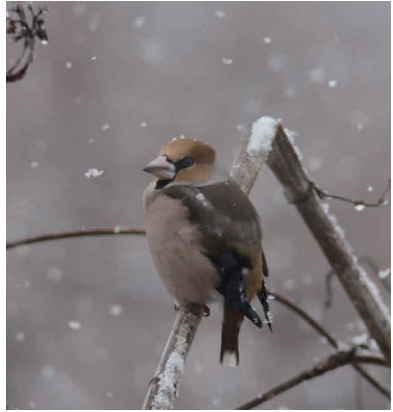
シジュウカラ科 シジュウカラ

シジュウカラ科の中で一番ポピュラーな鳥で、庭などにもやって来る。胸から腹にかけて黒い羽が帯になっている。巣箱などもよく利用して繁殖する。庭の巣箱での繁殖成功率は高いようだが、林での繁殖はアオダイショウの捕食が多く、成功率はかなり低い。最近の研究で音声（言葉）による複雑な伝達をすることが分かり、例えば雛が大きくなった頃にはへビが捕食者であれ

ば、一斉に巣箱から飛び出して逃げることを、捕食者がカラスであれば静かにして、親鳥の合図で逃げるタイミングを決めることが分かってきた。

アトリ科 シメ

冬にやってくるスズメより一回り大きな小鳥であり、植物の大きな種を割り食べるために頑丈で太い嘴くちばしを持っている。鳥類標識調査で捕えた時に噛まれる事があるが、ペンチで挟まれたように痛い。普通、単独や小さい群で動いているが、オオブタクサの種が落ちている堤防などでは200羽を超えるような群になる。春になると嘴は青い色を帯び、北海道やさらに北の繁殖地へ戻っていく。



シメ

スズメ科 スズメ

住宅地に住む、もっとも身近な鳥であるが、人への警戒心は強くもっている。最近では全国的に個体数が減少していると言われている。屋根の穴などで繁殖するこの鳥には、現代の家の作りは巣場所である隙間が無くなっているため、住宅難から減っているとも考えられている。繁殖期に親の嘴くちばしは黒く、雛は嘴の根元が黄色い。嘴の黄色は若輩の代名詞になるが、実はスズメは冬には成鳥も嘴の根元が黄色くなる。スズメの年齢を見分けるのも難しいものだ。繁殖期はペアで住宅地に住むが、夏の終りから農耕地で集団になっている。



スズメの親子



ツバメ

ツバメ科 ツバメ

この鳥も身近な鳥であるが、個体数は減少している。家の軒下に巣を造り繁殖する。ヨーロッパの近縁種の研究では、尾の長い雄は雌にもてて、早く繁殖に入れるという。尾が長いと飛翔時に空気抵抗を受けるので生存にマイナスだが、それでも生き残っているのは優秀な雄というわけで、優秀な個体と番^{つがい}になり、優秀な子孫を残そうと雌が選択するという。一夫一妻で繁殖するものの、劣位の雄と番^{つがい}になった雌は、積極的に優秀な雄と交尾して、優れた子孫を残そうともするという。浮気をされた雄は、自分の子供か分からないので、子育てにあまり熱心にならないのも。なんとシビアーな世界だろうか。



ヒバリ

ヒバリ科 ヒバリ

農耕地や河原などに生息している。最近では、個体数は減少しているが、早春の晴れた日に囀^{さえず}る声を聞くと、春になったと強く感じる。春から夏には、囀^{さえず}る声が賑やかだが、夏の終りと共に、何処にいるのか判らなくなる。少数の個体は残っているが、他の個体は移動しているようだ。ただし、何処へ行っているのか不明だ。名前の良く知られた鳥でも、生態は未だに良くわからないことが多い。



ヒヨドリ



ムクドリ



メジロ

ヒヨドリ科 ヒヨドリ

森にも市街地にも現れ、ヒーヨ、ヒーヨと高い声で鳴く、どこでも見られ、庭の木の実などを食べ、嫌われることも多い。さらに、数十羽の群で移動しながらブロッコリーや野菜類を食べ、さらに嫌われる。春や秋には100羽以上の群になり、渡りをする。秋、愛知県の伊良子崎では半島の突端から群で飛び出すと、海の上でハヤブサに襲われ、犠牲者をだしながら岬に戻ってくる。一見に値する光景である。渡りは命懸けのイベントのようだ。

ムクドリ科 ムクドリ

樹洞や屋根、戸袋の隙間などに巣を造るので、電線や屋根やアンテナなどに止まっているのをよく見かける。繁殖期はペアだが、他の時期には群になる。夜の^{ねぐら}時は数千から数万羽になることもあり、鳴き声の騒音、落ちる糞で問題になり嫌われる。そんなことが無ければ、^{ねぐら}時に入る頃のマスゲームのような飛翔行動はすばらしい光景だ。それと、もう一つ、彼らの産む卵は水色をしていて美しい。

メジロ科 メジロ

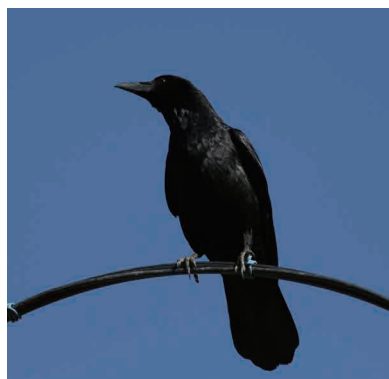
目の周りに白い帯、名前の通りだが、おとなしく可愛い鳥である。繁殖期が終わった後には小さい群をつくることもあるが、ふだんは雌雄のペアで行動している。雌雄の判別が難しく、この鳥を研究していて有名な鳥類学者の橘川先生も、初めはどのように雌雄を鳥が判断しているのかわからなかったと言っていた。ところが、市内の昔の子供は雌雄を見分けた。地鳴き（^{さえず}囀りではない冬の鳴き方）が雌雄で異なるのである。それと、ウグイス餡の色はこの頭部の色。



モズ♂



オナガ



ハシボソガラス

モズ科 モズ

秋になるとけたたましく鳴く声が良く知られている。秋から冬には雌雄共に単独でなわばりを持って生活している。畑の梅の木の枝には、コオロギの頭が首狩り族のように刺してあるのを見かける。そんな早贄はやにえは秋の風物詩だ。

嘴くちばしが強く、捕えたバッタなどを木の尖った枝に引っ掛けて、分解しながら食べる。食べきれない獲物は枝に刺したまま貯食する。早春には繁殖を始めるが、市内では、ほとんどの個体が1回目の繁殖が終わると、5月中旬には移動する。高地や北へ向い、再繁殖する。9月に入ると戻ってくる。

カラス科 オナガ

体羽はパステルカラーできれいだが、鳴き声はゲー、ゲーと濁る。20羽くらいの群で生活するが、市内ではずいぶん個体数が減少し、群のサイズも小さくなった。国内では関東から東北地方にかけて分布する。世界的に見れば、中国とポルトガルにも亜種がいて、珍しい分布を示している。そのため、外国人のバードウォッチャーには人気があるようだ。

カラス科 ハシボソガラス

農耕地に生息するカラスで、ガアー、ガアーと濁った声で鳴く。市内では以前はほとんどこの種であったが、最近は少し減っているように感じる。カラスは一夫一妻で繁殖する。強いなわばりを構え、同じ

カラス類のハシブトガラスとも種間でも争い、雛が巣立つと家族群をなつて、雛が独立するまで世話をする。繁殖が終わる秋になると、群になり、夜には大きな集団ねぐらをつくる。罫入りは、日没前に小集団ねぐらになり、日没時にはねぐらへ集団で向かう。

カラス科 ハシブトガラス

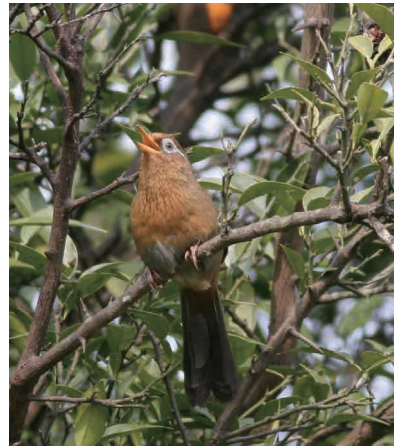
森林や都会に多く生息する。以前はあまり見かけなかったが、現在は市内でも街の中に住んでいるのはこのカラスがほとんどである。くちばし嘴が太く、カーカーと鳴く。ハシボソカラスより少し身体が大きいが、警戒心は強い。集団でゴミなどを漁り、繁殖期には巣立った雛を守るために人に攻撃をすることもあつた。夜は集団でねぐらをとり、ハシボソカラスと混じることもある。



ハシブトガラス

チメドリ科 ガビチョウ

中国原産で、市内では20年前頃に侵入した。環境省から特定外来種に指定され、同じ環境に住む在来種への影響が心配されている。今では市内の全域で見られ、個体数も多く、庭にも現れる。ムクドリくらいの大ささで、地上や低木内を移動し、春から秋までの長い期間、さえずり囀りが聞こえる。色々な他種の鳴き真似が得意で、どれが本来のさえずり囀りなのか分からなくなる。藪の中に巣を造り、水色のきれいな卵を産む。



ガビチョウ